



「臥竜鳳雛」



*タイトルの意味は？調べてみよう

2020・5・28日 第24号

学年主任 森本 聡一郎

1. 「今は自分自身と向き合うチャンス」

世界的な新型コロナウイルス感染拡大の余波を受け、夏場の全国大会も開催中止になった。4月7日に政府による緊急事態宣言が発令されたことを受け、4月26日には全国高校体育連盟が臨時理事会を開き、今夏の高校総体（インターハイ）、2日後の28日には日本中学校体育連盟が全国中学校体育大会（全日中）の中止を決定した。1948年の第1回大会から72回実施されてきたインターハイ、1974年の第1回大会から45回開催されてきた全日中は、共に史上初の中止となった。両大会の代替大会を求める署名活動が行われるなど、中高校生、特に今年最終学年を迎える選手たちの思いを汲むべく、各都道府県や支部単位で秋以降の大会開催を求める声は多い。

外から見たら、「全国高校総体の中止」という事実だけかもしれない。でも、インターハイはそれだけじゃない。県大会も地区大会も、全国を目指す過程を含めてすべてがインターハイである。全国の舞台に立てるのは、ほんの一握り。私の指導する陸上競技部においても「兵庫県大会を目指す」というのがアイデンティティである。丹有大会で敗れ、個人種目で県大会に出場できない者もたくさんいます。大人目線で話を進めれば、「次、頑張ればいい」という表現も出てくると思います。でも、高校生には高校生の目標があります。そこを一つの終着点として選手たちは毎日練習に励んでいます。確かにインターハイがなくなっても、「夢」はなくならないかもしれない。でも、「高校生としての夢」はなくなりました。各カテゴリーの選手がそのときの目標に向かって努力した延長線上に、夢の舞台があるのではないのでしょうか。

陸上短距離の桐生祥秀（きりゅうよしひで）選手も「中学生にはインターハイがある。高校生にはインカレや日本選手権がある。だから頑張ろう、と安易には言えない」と、SNSでコメントを出しています。「次」がある選手ばかりではないんです。

インターハイの中止が決定したのが4月26日でしたが、その前にも程度覚悟はしていたと思います。「頭では理解していても、ショックです」「数日間、練習できませんでした」選手たちは、そう言いながらも必死に今と向き合って前を向こうとしています。3年生も含め、開催が決まっていない大会に向けて、今も練習を継続しています。連絡を取るとみんな、練習の報告をしてくれます。今の状況は誰のせいでもありません。対立軸がないからこそ、やるせない、選手たちに掛ける言葉もみつきりません。

今、全国の指導者が「何とかして練習の成果を発揮できる機会をつくりたい。」そう思って動いています。でも、なかなか上手く行かないのが現状です。大会の開催はコロナ次第。コロナが収束しても、部活動は二の次、三の次。

今、世の中を見ているとどうしても「文化」「スポーツ」がないがしろにされているように思えてしまいます。安全や平和があってこそそのものだというのは十分理解しています。が、人類がどれだけスポーツに助けられ、勇気を与えてくれたのか。スポーツの役割は、表面に出てくるものだけではありません。数字に表せないものがたくさんあります。そして、スポーツをする、上を目指す過程でどれだけ時間をかけているのか、それを私たちは肌で感じてきました。

大会がなくても部活動はなくなりません。今は、つらくて、悔しくて先が見えなくてしんどい時だと思います。でも、今だからこそ、自分を見つめる大事な機会になるのではないのでしょうか。これまでは顧問に言われたことをやるだけの部活動だった人もいると思います。でも、その存在が今、目の前にいない。こんなご時世だからこそ、自分に目が向くいい機会です。自分と向き合って、自立をするという意味でも、この数か月を無駄な期間と思っはいけません。部活動の結果として表れなかったとしても、必ずどこかでこの経験を生かせるときがあります。無駄なことなど何一つない。キミ達はそれを部活動から学んでいるはずで

2. 「登校日の様子」

5月21日（木）



手洗い5つのタイミング

- ①公共の場所から帰った時
- ②咳やくしゃみ、鼻をかんだ時
- ③ご飯を食べる時、その後
- ④病気の人のケアをした時
- ⑤外にあるものを触った時

登下校中もマスク着用を！

次回登校可能日は

5月28日(木)です！！